

130. 大津市延暦寺北谷善学院跡 発掘調査概要

はじめに

本調査は、比叡山延暦寺の東塔・西塔地域を中心とする総合防災工事に伴う現状変更に係る事前調査である。総合防災工事の中心は、大宮川から防火用水を汲み上げて山頂の貯水池にため、そこから管路を通して東塔や西塔の各堂坊へ導くものであるが、この管路埋設部分の試掘調査を昭和56年度より実施しており、本年度で4年度目をむかえる。そして、本年度の調査対象地は、北谷地区と根本中堂から本願堂へいたる部分である。

調査は、昭和59年6月13日より10月22日まで約4か月を要したが、北谷では昨年度と同様江戸時代の坊跡を確認し、根本中堂前面と本願堂南平坦地では江戸時代後期の暗渠跡、階段を確認した(註1)。

現地調査の終了後、現在遺物等を整理中であるが、ここでは北谷地区の調査についてその概要を紹介したい。

1. 東塔北谷

比叡山延暦寺は、東塔・西塔・横川の三塔十六谷に堂塔伽藍がそびえている。このうち根本中堂の北側の谷筋が北谷にあたり、古絵図によると各所にはかつて「三千僧坊」を数えたといわれる堂坊が存在していたことがわかる。

ケーブルカーやドライブウェイが完成する前の根本中堂への参道は、本願堂から総持坊を経て根本中堂へ登って行くルートであり、参道の西側には、北谷の堂坊がその雄姿を見せていたのである。現在では、往時の面影を見つけることは出来ないが、当時はかなりの賑わいであったらしい。

古絵図と照合した結果、本年度の調査地点が「善学院」跡、昨年度の調査地点が「善光院」跡と考えられるにいたった。

以下、北谷地区の調査結果を述べたい。

2. 調査結果

〈第1地点〉—善光院跡

昨年度調査地点の南平坦地で、上の平坦地へ上る管



遺跡位置図

1/25,000

路の位置を確定するため、南北方向に3本、東西方向に2本のトレンチを設けた。

各トレンチとも表土を除去すると、黄褐色小角礫混り弱粘質土(全体的に層中の遺物は少ない)となり、表土下約20~30cmで地山となる。

第2トレンチで、「善光院」跡に関連するとみられる南北方向の石列を検出し、石列内より伊万里の碗が1点出土している。他のトレンチでは遺物も少なく、何ら遺構は認められなかった。

〈第2地点〉—善学院跡

標高約650mにある約1000m²の平坦地で管路確定のため全面発掘を実施した。その結果、江戸時代中期の遺構(「善学院」跡)を確認した。

検出した遺構は、平面形がコの字状をなす建物と、それに付属する蔵とみられる建物からなり、コの字形にはさまれる位置の空間は中庭のような性格をもつものとみられる。そして、書院風の奥座敷の西には花崗岩の縁側の踏み石が存在していた。なお、建物の東辺部分はケーブル埋設時に掘削されており保存状態がきわめて悪かった。

建物の北側と西側には中世の土塁が残っており、南東部分には石垣がある。

礎石には、矢穴痕がある花崗岩の切石の他に、約20



北谷古絵図

~50cmの平坦な石や、室町時代に使用されたと考えられる円形の礎石も認められた。中には、焼けたものも存在している。「善光院」跡で礎石に多く転用されている。



遺構全景 (南から)

た五輪塔の笠や台座の石はここでは全く使用されていなかった。

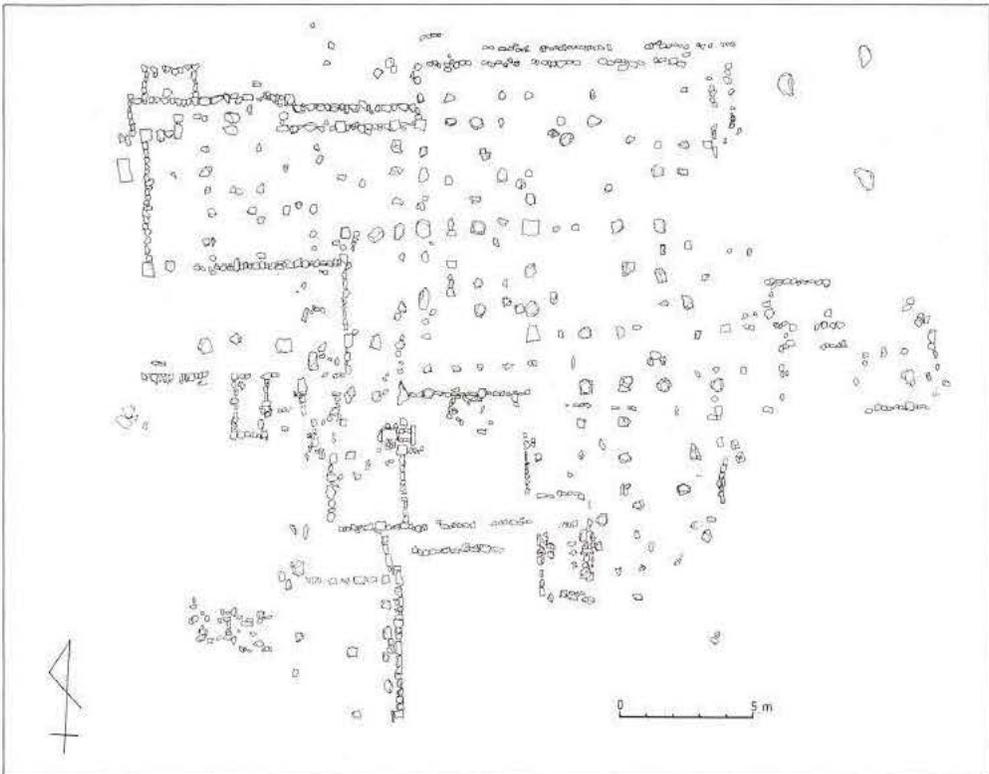
〔カマド〕 一辺約30cmの六角形を呈し東に焚き口がある。石組は、小角礫を底から約3段階積み上げた上に各壁には約30~40cmの石がほぼ垂直に据えられている。焚き口と奥壁には花崗岩の切石を使用している。

埋土は赤褐色焼土で、埋土内より木炭片が出土している。

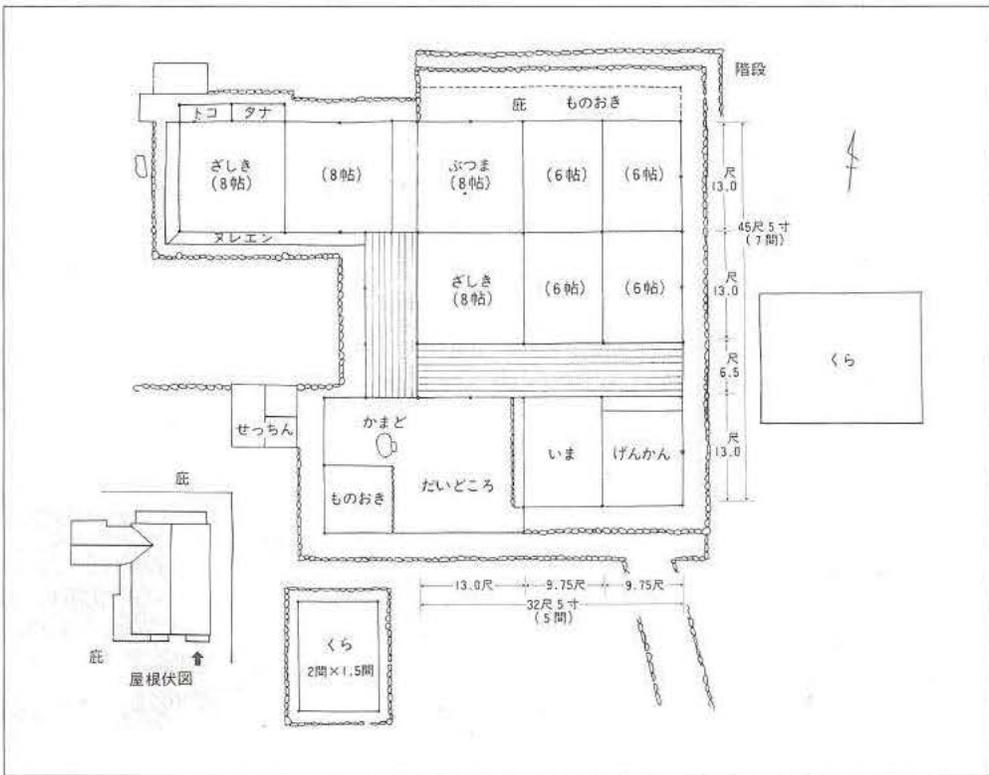
このカマドの東にも焼土が認められ、周囲には不整形に石が据えられており、カマドの残骸とも考えられる。

〔雪隠〕 台所の西と奥座敷の北の二か所にあり、台所の西のものは普段使用するもので、奥座敷の北は客用のものと考えられる。

雪隠には、大と小用の区別があり約20cmの石で周囲を囲っている。



善学院跡平面図



善学院跡推定平面図

(鈴木順治氏作成 (註2))

二つの雪隠とも内部を地山まで掘り下げたが、襖などは出土しなかった。これは、建物と床面のレベル差から考えて他の場所へ移動された可能性が高いと考えられる。

〔門〕 古絵図に描かれている門の位置は木の根でかなり攪乱されており確認できなかった。東側で「善学院」へ通じる道の階段を検出した。

3. 出土遺物

ここでは、第2地点より出土した遺物について紹介する。

今回の調査で出土した遺物は土師器、陶磁器、古銭、瓦、鉄製品等である。

〔土師器〕 出土遺物中約6割を占める。いわゆるかわらけの破片で、口縁部内外面をなでるものや、内面のみをなでるものがある。色調は赤褐色を呈する。中には灯芯の痕跡が認められるものもある。

〔陶器〕 壺、甕、摺鉢、天目茶碗、土瓶、徳利、皿等の破片が出土した。これらは備前窯、丹波窯のものが多く、信楽窯のものが意外と少なかった。中でも注目されるのが美濃の菊文皿である。出土した陶器は全体的にやや肉厚に成形されている。

〔磁器〕 鉢、碗、皿、湯呑等の破片が出土している。見込みや高台内に「成化年製」、「富貴長春」などの銘を置くものがある。

染付は伊万里系製品が多い。

なお、輸入陶磁器はほとんど出土していない。

〔古銭〕 調査区全体から散発的に5枚出土した。寛永通宝が4枚、元禄通宝が1枚である。

4. おわりに

遺構の年代は18世紀で、昨年度調査した「善光院」

と比べ、「善学院」は規模も大きくかなり手の込んだ建物であることから北谷の中心的な坊跡であると考えられる。

室町時代のもと考えられる円形の礎石が一部で建物の礎石列よりずれている箇所があり、当地に一時期古い建物が存在していたことも推測される。

北谷における坊跡の一つのパターンについて考えてみると、建物の背後の斜面の裾にはいわゆる穴太衆積み石垣があり、土砂留めの役目と境界の役目を果たしている。そして前方には風よけの土塁が巡らされており、特に北側は高くなっている。建物自体は坂本に点在する里坊と非常によく似ている。

出土した瓦量が少なく、建物の屋根には棟の部分に瓦を使用し、他の部分は檜皮葺きであったと考えられる。

「善光院」では、4m四方の深さ2m程の石組遺構を水溜めと考えられている。「善学院」では、平坦地の西南隅に短辺約1m×長辺約2mの石囲があり、これを水溜めと考える。

水は、下の川まで汲みに行ったと考えるより弁慶水から樋を用いて導いたものと考えられる(註3)。

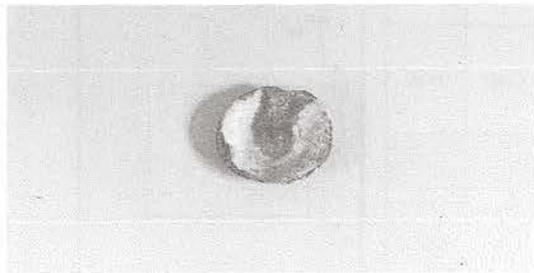
以上、簡単にこれまで整理したいくつかの点について述べたが、今後陶磁器類の分類作業を進め改めて報告したい。

(氏丸 隆弘)

註① 神谷友和「延暦寺東塔遺跡」(『滋賀文化財だより』No.84 1984年)

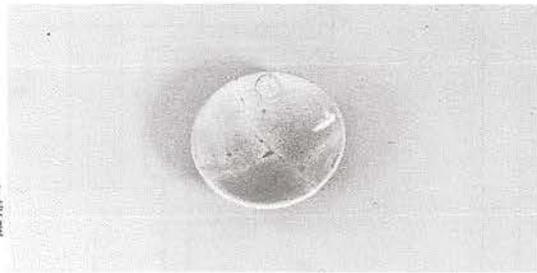
註② 玄関部分についてはケーブル埋設時にかなり攪乱を受けており検討中である。

註③ 兼康保明「大津市延暦寺法華総持院跡発掘調査抄報」(『滋賀文化財だより』No.36 1980年)



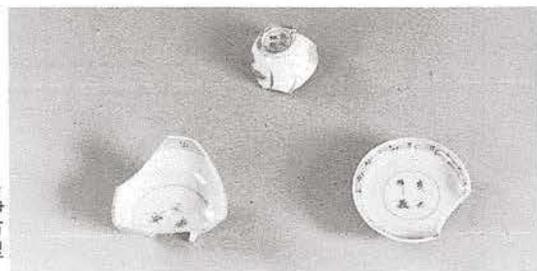
土師器

美濃



信楽
備前

伊万里



善学院跡出土遺物